

光星V 本県出身 向井、安藤投手



閉会式終了後、肩を組み満面の笑みを見せる県人選手の向井(左)と安藤=21日午後、青森市営球場

「絶対母を甲子園へ」

感謝胸に約束果たす

野球部員数が150人を超える八学光星で、わずか20人のベンチ入りメンバーに本県出身の2年向井詩恩投手と三沢二中出と安藤投手と白銀中出が名を連ねている。両投手は試合後の取材に「甲子園で登板できれば、持ち味の直球で三振を取りたい」と満面の笑みで口をそろえた。

「甲子園に出場し、プロ野球選手になって母に恩返しをしたい」。女手一つで育ててくれた母・千鶴さん(37)への感謝を胸に、優勝の喜びをかみしめた向井投手。小川原小(東北町)3年時に野球を始め、6年生だった2011年夏、甲子園準優勝の川上竜平選手とプロ野球ヤクルトの姿に憧れて八学光星を志した。

中学2年の時、チームの全国16強入りに貢献するなど実績を積み、仲井宗基監督から直接勧誘を受けた。

なかつたが、ベンチで声を張り上げ仲間を鼓舞した。昨夏の大会では、地元チームと一緒にプレーした仲間もいた三沢商に決勝で敗れ、甲子園を逃した。それだけに千鶴さんは「あの時は悔しい思いがあったと思う。本当におめでとうという気持ち」と語った。

安藤投手の母・匡子さん(45)は「(安藤投手から)絶対甲子園に連れて行くと言われていた。終わった瞬間涙が出そうになった。やっとねって言ってあげた」と笑顔。安藤投手は「甲子園で投げるチャンスができたのでうれしい。大会に

「一番長い夏」健闘期待



八学光星初回の攻撃で、先制点に沸く一塁側スタンドの父母ら

「甲子園だよ、甲子園!」から駆け付けた父母は感激優勝を決めた瞬間、八学光星の一塁側応援席から大きな声で応援した。県内外からは健闘した選手たちに拍

父母、OBら声援実る

手を惜しまなかった。益田敦成選手の父・郁也さん(43)は「このチームで甲子園に行くために頑張ると言っていた。個人成績より、約束を守ってくれてうれしい。スタンドで声援を送り続けた生徒会長の山田鈴星君(18)は「大阪出身は甲子園で優勝を果たすまで一番長い高校野球となるよう、応援する」と話した。

同校OBの小笠原匠哉さん(19)は「青森市、大学1年」は「甲子園初制覇」とエール。昨年のレギュラーメンバーで、準優勝と悔しい思いをした塩野稜(りょう)さん(19)は「埼玉県朝霞市、大学1年」は「決勝は昨年と同じ公立高との組み合わせで、リベンジを果たして欲しい」と後輩の姿に目を細めた。(下館悠々)

向け、向井と切磋琢磨(せつたくかく)しななんだ。(本田海輝、下館悠々)がら頑張りたい」と意気込